

堀切神庭農道整備事業に伴う

# 御射山横穴発掘調査報告書

1982年3月

斐川町教育委員会

## はじめに

このたび、斐川町大字莊原・直江両地区を結ぶ農道が新設されることになり、その予定地内である莊原町御射山地区において発見された横穴を、斐川町建設課の依頼を受けて発掘調査を行ないました。

さて、当斐川町には仏教山（神名火山）山麓を中心に多数の古墳、横穴が分布しており今回調査を行なった御射山横穴もその一つです。

その調査結果をまとめた本書は、今までほとんど知られていなかった斐川町における古墳時代～奈良時代にかけての生活、埋葬様式を解明するうえで大きな役割を果すものと考えます。

なお、今回の調査にあたり終始ご協力いただきました鳥取県教育委員会文化課をはじめ関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

1982年

斐川町教育委員会

教育長 古川 喜志夫

## 例　　言

1. 本書は堀切神庭農道整備事業に伴う御射山横穴発掘調査報告書である。
2. 調査は、斐川町建設課の委託を受けて、斐川町教育委員会が実施した。
3. 調査地点は斐川町大字莊原町 590-1 であり、調査は以下の体制で行なった。

調査員 勝部 昭 (鳥取県教育委員会文化課埋蔵文化財第一係長)

片寄義春 ( 同 文化財保護主事)

事務局 多々納 弘 (斐川町教育委員会社会教育課長)

金築 基 ( 同 主事)

4. 調査にあたっては、斐川町建設課、鶴島課長補佐、同才木主事、同三島主事、斐川町教育委員会社会教育課・長瀬主事、斐川東中・金崎教諭の協力を得た。

5. 本書の執筆及び図版は主として調査員が行なった。

## 目　　次

### は　じ　め　に

I 調査にいたる経過 .....	1
II 遺跡の位置と環境 .....	2
III 御射山横穴の概要 .....	4
IV 出土遺物の概要 .....	6
V 結　語 .....	7

## I 調査にいたる経過

- 沿線住民の長年にわたる要望であった堀切神庭農道の改良工事が、昭和55年度より総事業費22400千円で始まる。
- 昭和56年4月1日、錦織運吉氏より道路予定敷地内において立木除去作業中に遺物を発見したと町教育委員会へ報告がある。
- 同日、町教育委員会より島根県教育委員会文化課へ遺跡の確認を依頼し、同3日、文化課主事卜部吉博氏により横穴であると確認する。
- 同日、町教育委員会より建設課に対し、発掘調査終了まで工事の中止を依頼。
- 昭和56年6月12日文化財保護法98条の2第1項による発掘調査通知書を提出し、調査に入る。

## II. 遺跡の位置と環境

1. 位置 御射山横穴は高瀬山（標高304.7m）から派生する神庭丘陵の縁辺部に位置し、地番は斐川町大字莊原町590-1である。往古竪川西流絵図（島根県史第一巻附図）という古地図によると往時は、このあたりまで宍道湖がのびており、斐川町の大半の平野は水底であったことがわかる。御射山横穴の近くには「神場村」（今の神庭か）の地名が見られ、集落が営まれていたことがうかがえる。

2. 周辺の遺跡 御射山横穴周辺の出土品や遺跡のようすは次のようである。

(1) 繩文時代 上学頭の永徳寺付近より磨製石斧、三絡の波知神社付近の水出中より石斧、羽根で石鐵三個、平野で石鐵、石槍（三絡の西光院保管、いずれも黒曜石製）などが採集されているが、共伴土器がないので時代判定はできかねる。平野南側の丘陵部を中心に生活が営まれていたといえよう。

(2) 弥生時代 この時代の遺跡としては、現時点では特筆すべき遺跡はないが、斐伊川鉄橋付近の遺跡があげられる。今市水道と大和紡績出雲工場の水源井戸の掘り下げの際や、昭和37年国鉄山陰本線の鉄橋かけかえ工事中に、深さ7m前後の粘土層から弥生後期の土器が古式土師器とともに発見されている。

(3) 古墳時代 直江、平野地区の丘陵上から、点々と古式七輪器の壺や器台などが出士している。なかでも狼山出土の土師器壺は形や文様から注目されるものである。これとよく似たものとして、三刀屋松本一号墳（前方後方墳）の前方部出土品や、前述の大和紡績出雲工場の水源井戸出土品がある。また、出西沢田の丘陵からも5の字口縁の壺が出士している。斐川町内の古墳（姫塚も含めて）等は51個所が知られている。

軍原古墳—御射山横穴の東方約2.5kmにある。古墳時代中期ごろ築造の大形古墳であり、現状では直径30m、高さ2.5m～3mの円墳である。もとは前方後円墳（全長約50m）であった可能性がある。内部主体は長持形石棺を納めている。出土遺物は直刀4、勾玉2、菅玉18、梯6、クモ貝製貝輪2、鉄錐若干である。

神庭岩船山古墳—軍原古墳の西方約1.8km、御射山横穴東方0.6kmの宇屋谷神庭に所在する。これも古墳時代中期の築造と目され、もとは5.7～8mもあった前方後円墳である。高さは前方部4m、後円部6.5mを測る。内部主体は舟形石棺と推測される。

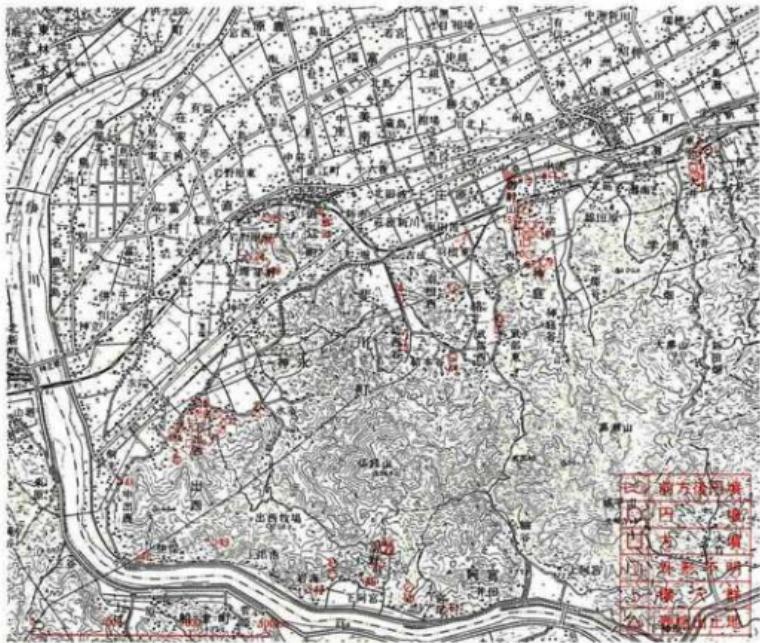
これら、二つの古墳は出雲地方西部にあって出雲市東林木町大寺古墳につぐ古さをもつ大形古墳である点、このあたりが『風土記』に健部郷と記されることとあい

まって注目されるところである。

その他特徴ある古墳としては、出西丸子古墳（円墳）がある。これは玄室と羨道との境の閉塞石前面にかんぬき状の陽刻を有するめずらしいものである。

横穴についてみると、直江八頭のコモゴ横穴群、平野の剣山横穴群、出西の沢田横穴群、八幡宮横穴、山の奥横穴群、出西伊保の海の平横穴群、岩海横穴群、阿宮の墓田横穴群等があり、家形妻入り形式のものが多いようである。これら横穴の出土遺物としては、直刀の出土例もあるが須恵器は、山陰地方の編年で第IV期のものである。

#### 斐川町内古墳等分布図



(斐川町史より転載)

1. 軍原千人塚古墳
2. 宇原古墳 (3. 宇原丘上1号墳 4. 同2号墳 5. 同3号墳)
6. 小丸子山古墳 (7. 上学頭丘上1号墳 8. 同2号墳)
9. 同3号墳
10. 同4号墳
11. 同5号墳
12. 同6号墳
13. 同7号墳
14. 宇屋神庭丘上1号墳
15. 同2号墳
16. 同3号墳
17. 同4号墳
18. 神庭岩船山古墳 (19. 長文多神社古墳 20. 同西古墳)
21. 白堀古墳
22. 西光院裏山古墳
23. 武部東古墳
24. 武部西古墳
25. 結城古墳
26. 黒船古墳
27. 岩野原古墳
28. コモゴ横穴群
29. 平野丘上古墳
30. 刺山巣穴群
31. 青ヶ丘古墳
32. 長者原古墳群
33. 後谷東古墳
34. 後谷町道脇古墳
35. 後谷山麓古墳
36. 沢田横穴群
37. 八幡宮横穴群
38. 出西丸子古墳
39. 出雲寺山古墳
40. 山の奥横穴群
41. 青木勝四郎宅西横穴群
42. 海の平横穴群
43. 岩海横穴群
44. 岩海南古墳
45. 横手古墳
46. 下阿宮古墳 (47. 高野1号墳 48. 同2号墳 49. 同3号墳)
50. 布子谷古墳
51. 墓田横穴群
- ◎ 鶴射山横穴

## Ⅲ 御射山横穴の概要

今回の調査においては、二つの横穴が検出された。北にむかって竹林が連なっており、その中に円墳も確認されるが、横穴もまだありそうである。

横穴が検出された崖面の地層の層序は、上から腐蝕土（150cm）茶褐色土（50cm）黄色土（120cm）であり、その下は砂鉄まじりの白灰色砂質土で、そこに掘りこんだ横穴である。

北側のものを1号穴、南側のものを2号穴と呼ぶ。いずれも羨門部に石積みをし、側石を積み、その上に天井石をのせている。その中は閉塞用の栗石を黒褐色粘質土でかためながらかたく閉ざされていた。1、2号穴とも雨天のあとには湧水があり、特に2号穴奥からはわき出るように流れ出てくる。横穴内は落剝はみられなかったが、外部から流れこんだ土で完全にうまっていた。しかし、その上の色とやわらかさから、掘り出すのは容易であった。

前部は、すでに重機が削っていたために明確にはとらえられなかった。しかし2号穴については羨門部近くは検出することができた。

**1. 1号穴** 第1図に示す1号穴は、奥行101cm、幅126cmの歪んだ凹形を呈する平面形で、高さ63cmの玄室をそなえた簡単な作りの横穴である。羨道部は奥行き114cm、幅56cmを測り比較的長いものである。入口と玄室を結ぶ線の方位はほぼ東西にむいて掘られている。東に向って立った場合羨門部の石積みの向きに対して、玄室、羨道の向きは、かなり右にずれているのが特徴的である。床面と壁面、壁面と天井の界線は明瞭ではなく、玄室の断面は半円形である。床面には屍床等の施設はなにも検出できなかった。

羨門部の石積みは南北両側とも側石を縦に積み、背の高い石に合わせるように他の石を積みそろえ、その上に天井石をのせている。この天井石はたて70cm、よこ35cm、厚さ18cmの長方形状の自然石であるが、機械によってとばされていた。そして、その間を小さな川原石（栗石）をつめ、前述したように黒褐色粘質土でかためてあった。

1号穴の出土遺物は少なく、玄室、羨道部に流れこんだ土の中から須恵器片や同壺片が若干出土しただけである。羨道部の石積みの前面の底からは完形に近い高台付壺身さらにはぼ同じ場所から蓋壺破片等が出土した。

**2. 2号穴** 第2図に示す2号穴は、奥行235cm、幅145cmで、あたかも「とっく

り」のような平面形で、高さ 110 cm の玄室をそなえている。羨道部は奥行 130 cm、幅 40 cm を測り、1 号穴と同様長いものである。玄室と羨道を結ぶ線の向きはほぼ東西をむき羨道の石積みと玄室が直線となる点、1 号穴とはちがい整った作りといえる。床面と壁面は比較的はっきりした界線がみとめられるが、壁面と天井の界線は不明確で、壁面がなだらかなカーブをえがきながら天井面となっている。玄室の断面は 1 号穴と同様半円形である。

羨門部の石積みは、北側は側石を横に積んで高さをそろえ、南側は羨道部に入りこんで横石をおき少し手前にずれて、その横石のほぼ上面と同じ高さから大小二箇の石をたてに積み小さい石の上に栗石を積み大きい石の高さに合わせている。その上に天井石（川原石）をのせている。閉塞の状態は 1 号穴と同様であるが、使われている栗石の大きさは 2 号穴の方が大きいといえる。

閉塞石の前面直下に閉塞板の掘り形痕があり、ここに閉塞板があったことがわかる。これも 1 号穴とはちがった 2 号穴の作りである。

2 号穴の出土遺物は、1 号穴とはちがって玄室内と羨道部においていくつかのものが検出された。玄室では石床、刀 1、刀子 1、須恵器（小形高坏 1、蓋坏 1 合、坏身 1、蓋 1、須恵器片 1）である。

石床は長さ 100 cm、幅 57 cm、厚さ 12 ~ 13 cm の長方形にちかい扁平な自然石で、軸線よりやや左側に据えられている。

直刀は、玄室の奥の方に南北にむけて置かれ、把頭部を石の上にのせた状態であった。つかがしちだ 全体に銹化がはげしい。把頭部が比較的残存状態のよいのは、石の上にあったためと考えられる。

とうす 刀子は玄室の奥の南隅で床面に切先を下に突き立った状態で出土した。これは刀ほど鋸びてはいないが、把などは腐蝕して欠失しており、刀身のみで残る。刃の部分がそれと確認できる。小形高坏は石床の中央右側の方に逆さになった状態で、やや手前にかたむいて出土した。

蓋坏 1 合は、小形高坏の右に置かれ、蓋は身より 4 cm 弱手前の方へずれており、蓋身とも小形高坏と同様、手前にかたむいた状態で出土した。

このようにかたむいたのは、玄室奥部から湧き出る水の力によるものかと考えられる。これらの石床以下の刀や土器等は石床面と同じ高さにうまた粘質土の土を堆土したあとに検出されたものである。

羨道部では北側石積みの下から須恵器坏身が、閉塞板の掘り形痕から前庭側へ 80 cm の場所から須恵器蓋坏 1 合と鐵鎌が出土した。

## IV 出土遺物の概要

### 1. 出土土器観察表

形	番号	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
小形 高壺	1	口 径 9.6cm 器 高 7.5cm	环口縁部は内湾気味にたち端部は丸い。底部は深く平たいが、中心部はややくぼんでいる。脚部は直線的に開き、端部は水平して垂直に下がる。	回転ナデ調整 底部中央に単印 脚部側面に単印あり	焼成良好堅緻 胎土密 砂粒を含む 色調灰色 外周一部は黒色の光沢あり
环蓋	2	口 径 10.3cm 器 高 3.5cm	口縁部は内湾気味に下方に下げ端部は太く丸い。天井部は中心部がくぼんで高くなっている。	回転ナデ調整 内と外に×印あり	焼成良好 胎土やや粗 細砂粒を含む 色調灰色
环身	2	口 径 8.7cm 器 高 3.9cm 受部径 11.3cm 立ち上がり 0.4cm	たち上がりは内傾し、端部は丸い。受部は外上方にのび、端部は丸い。 底部浅く、中心部は深く丸い。	回転ナデ調整 内と外に×印あり	焼成良好 胎土密 細砂粒を含む 色調灰色
环身	3	口 径 9.6cm 器 高 3.5cm	口縁部は外上方へたち、端部は鋭角的に丸い。 底部の中心部は深く丸い。	底部外面ヘラ削り後 ナデ調整 他は、回転ナデ調整	焼成良好堅緻 胎土密 細砂粒を含む 色調青灰色
环蓋	4	口 径 12.6cm 器 高 4.4cm	たち上がりは内傾し、端部は丸い。 底部の中心部は深く丸い。	底部外面ヘラ削り後 ナデ調整 底部内面ハケによる横ナデ調整	焼成良好 胎土密 砂粒を含む 色調灰色
环蓋	5	口 径 10.3cm 器 高 4.5cm	たち上がりは内傾し、端部は太く丸い。	回転ナデ調整 内面、外面に×印あり	焼成良好 胎土やや粗 砂粒を含む 色調灰色
环身	5	口 径 4.8cm 器 高 3.9cm 受部径 5.2cm 立ち上がり 0.6cm	たち上がりは内傾し、端部は丸い。 受部は外上方にのび、端部は丸い。	回転ナデ調整	焼成良好 胎土やや粗 砂粒を含む 色調灰色
高台付 环身	6	口 径 17.2cm 器 高 4.8cm	口縁部は外上方にたち、端部は丸い。	回転ナデ調整	焼成良好堅緻 胎土密 砂粒を含む 色調灰色 外面一部に自然釉がかっている。

これらの須恵器類は、山陰地方の編年上第IV期にあたる。これ以外に埋土の排除中に須恵器壺片や須恵器片が若干検出されたが、復原可能なものはなかった。

2. 直刀 長さ 8.8 cm を測る。鍛がひどく、わずかに把頭部がそれとわかる状態である。<sup>つかがしらぶ</sup> 把頭部には木片が付着しているところもある。また、鍔の断片も確認できる。いくつかの鍛化した片となっているが、その断面で刀の造込みをみると平造であることが確認される。しかし、その他刀装形式等の判定は不可能である。
3. 刀子 長さ 11.2 cm、刃の最大幅 1.6 cm を測る。切先は欠損しているが、刀身がわずかに外反りをしているのがわかる。把は何で作られていたかは不明である。
4. 鉄鎌 長さ 13.3 cm を測る。これも鍛がひどく有茎鎌ではあるが、詳細はわかりかねる。

## V 結 語

ここで、本横穴の特色、意義についてふれまとめとする。

- (1) 家形妻入り形式の多いとされる地域で、簡単な半面形の横穴である。  
出雲西部の横穴は家形妻入り形式が多いとされ、事実斐川町にもこの形式の横穴が確認されている。本横穴のような簡単なつくりからこのような横穴は家形妻入り形式が行われた頃より少し後にずれるのではないかと考える。
- (2) 美門部に石積み施設を有しているが、このように石積み施設のある横穴の例は、松江市十王免横穴群（6例）、仁摩町赤崎山横穴群等にみられ、これらとの関連する資料になるといえる。
- (3) 1号穴、2号穴はそのつくり、内部施設、副葬品にいくらかのちがいがみられるがそのちがいは、被葬者の生前の社会的地位を物語るものかもしれない。
- (4) 須恵器の形式から、第IV期に属するものであり古墳時代終末期、奈良時代頃と推定されると考えられる。

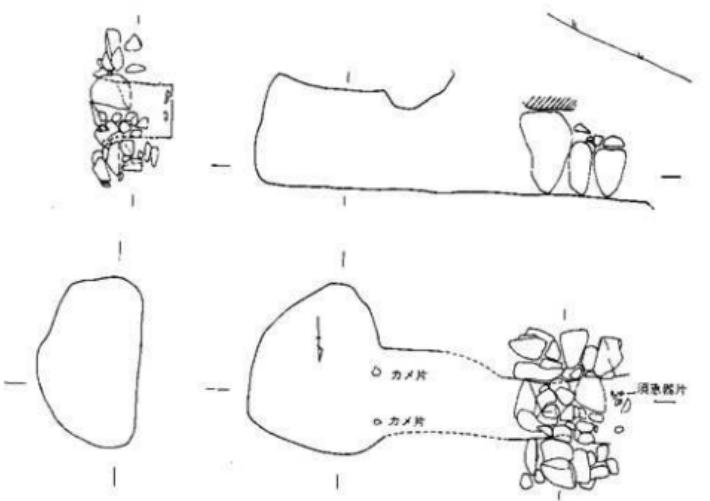


図 1 御射山第 1 号横穴

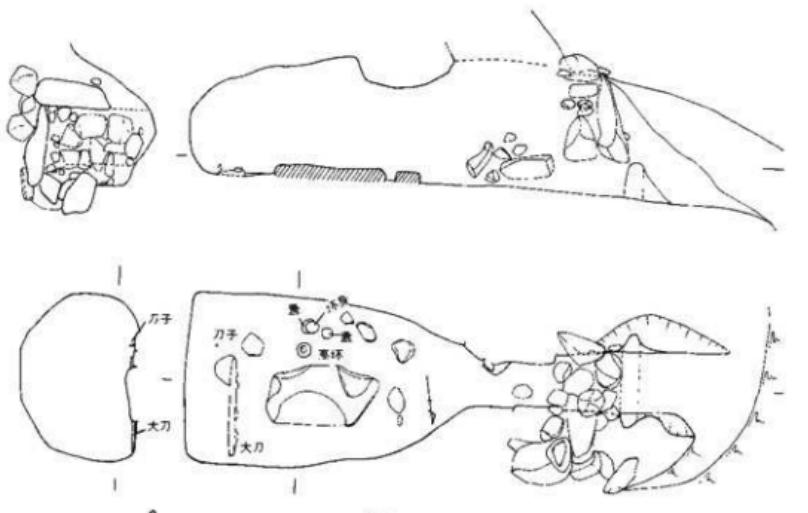
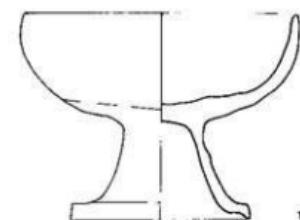
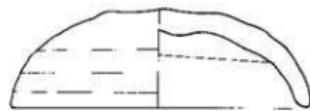


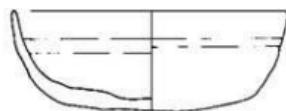
図 2 御射山第 2 号横穴



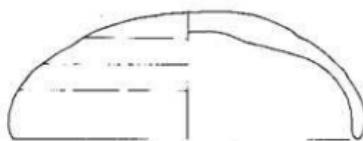
1



2



3



4

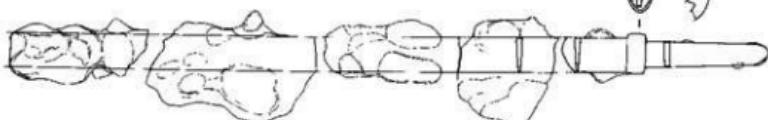


5



6

0 10 m



0 20 m



発見当時の状況



発見当時の状況(近景)



発掘風景



1・2号穴閉塞石石積状況



1号穴閉塞石  
(前方より)



1号穴閉塞石石積状況  
(上方より)



1号穴閉塞石石積状況



2号穴閉塞石石積状況  
(前方より)



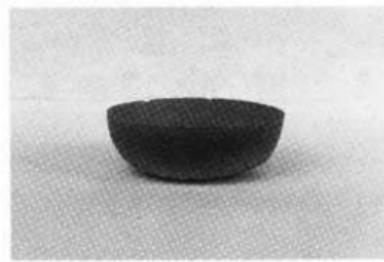
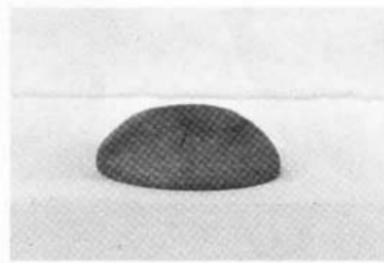
2号穴閉塞石石積状況

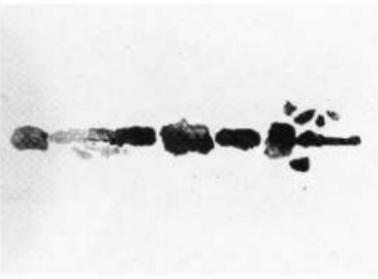
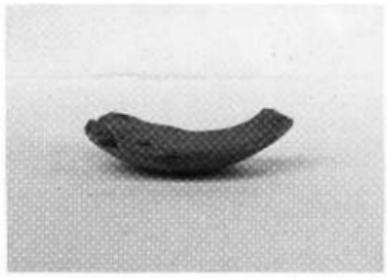
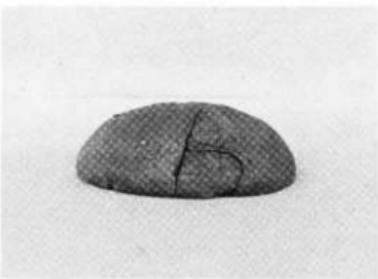
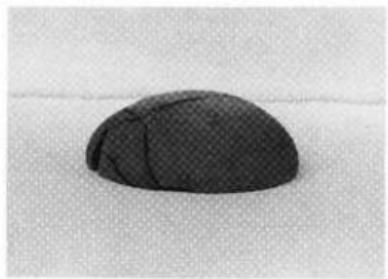


2号穴遺物出土状況  
(玄室內)



發 捏 調 査 後





1982年3月発行

岐阜県多治見市斐川町石原2172

## 斐川町教育委員会

印刷所 岐阜県多治見市斐川町石原2172  
萬葉切紙株式会社